

[研究ノート]

インクプロットテストにおける
shading反応に関する研究

—インクプロット刺激作成とデータ収集の試み—

八 木 孝 彦
八 尋 華 那 雄
長 田 久 雄
成 田 猛

片口 (1997) は「……陰影カテゴリーの分類にあたっては、諸家の間に不一致が多く、かなり混乱しているのが実状である。分類上の混乱は当然、解釈上の混乱をもたらし、諸家はそれぞれ異なった解釈仮説をたてている。…筆者は図版の刺激価の基礎的実験的方法にもとづいて、陰影反応のカテゴリーを設定したいと考えているが、未だに果たし得ていない」(p.198)と述べている。

そもそも、Rorschach (1954) の精神診断学には、shadingに関する記述は存在しない。その後には刺激である図版が出版された時に印刷上の誤謬で現在のロールシャッハ図版のshadingが出現したとPiotrowski (1957) が記している。Rorschachは、完成した刺激図版を見て驚いたが、すぐにその効果の意義に気づいて、shadingの決定因を追加して、F (Fb) と記号化している。

その後のロールシャッハ研究者はこのshading反応をどのように分類しているのだろうか。まず、Beck (1961) は、いわゆる材質反応をT、立体・通景反応をV、拡散反応をYと記号化している。前出のPiotrowskiは、すべてのshading反応をcとスコアしている。彼の知覚分析には、cFは必要でないとしてFc、とcだけのスコアである。そしてKlopfers (1954) は、材質反応をc、立体・通景反応をFK、拡散反応をKf、Kとして、弱立体反応 (k) を独立させている。

次に解釈仮説については、諸家の詳細な検討は別の機会にゆずり、ここでは基本的にKlopfersを踏襲している片口の解釈を紹介するのにとどめる。まず材質 (きめ) 反応については、不安を持ちやすいという意味で、不安準備性の指標と見なしている。FKは、児童期にほとんど出現しないことから、適量のFKは分化した人格と適応の良さを示すものとし、Kは漠然とした対象のない不安を反映していると解釈している。

次に本報告のshading反応の研究についての基本的なスタンスについて簡単に記述しておく。筆者等は次のような方法で研究を進めていくことがロールシャッハテストのshading反応に関する研究に資することができると考えている。

① shading 反応を産出しやすいインクプロット刺激を作成する。ロールシャッハテストにおける shading 反応に関する研究が基本になるのはもちろんであるが、shading 反応を産出する他のインクプロット刺激の作成とそれにもとづく検討も有効であろう。特に shading 反応を比較的多く産出させるような刺激図版の作成である。その図版のデータにもとづいて shading 反応の分類と整理の枠組みを考えることができるだろう。

②その刺激図版を使つての shading 反応多産出者の分析。この方法を使用して得られた shading 反応多産出者の性格や行動の分析によってロールシャッハテストの shading 反応に関する解釈仮説をより整合性のあるものにする事が可能であるかもしれない。

調査 I

本報告は①に関する基礎的探索的な試みである。今回の試行の目的は、実際にインクプロット刺激を作成すること、またそれを刺激として shading 反応が出現するか否かをチェックする簡便法（アンケート法）を試すことであつた。

[方法] インクプロット刺激は、研究を単純にすべく無彩色を使用し、B5 ケント紙と黒インクで約 350 枚作成した。その中から共同研究者が「shading 反応が出現しやすい」という暫定基準でチェックし、10 (I~X) 刺激を選択した。アンケートは、次のように作成した。B4 用紙を縦に使用し、最上段に先のインクプロット刺激をほぼロールシャッハ図版と同程度の大きさになるように調整して配置した。被調査者はまず、(1)インクプロットが何に見えたのかを下段①自由反応欄に記入する。ついで、(2)インクプロットに直接にその領域と理由を簡条書きする。(3)最後に②反応理由欄にその理由として当てはまる番号 (①インクプロットの形や輪郭が似ている、②インクプロットの黒・灰色・白といったグレー（無彩色）からそのように見える、③インクプロットのグレー（無彩色）の shading からそのように見える、④その他（自由に記述してくだ

さい))をいくつか選んで記入する。以上の手順を1インクプロットごとに依頼した(1刺激につき1反応)。被調査者の負担を考慮して刺激I～Vと刺激VI～Xを別冊とし、別の対象に施行した。またそれぞれの調査用紙には、本調査と同じ用紙で「回答記入の仕方」の見本を添付して被調査者の理解を助けた。

被調査者はC大学の心理学受講学生で、刺激番号I～Vまでが男子42名、女子19名の計61名。刺激番号VI～Xまでが男子43名、女子19名の計62名であった。

【結果】表1に量的結果を示した。まず全体反応率であるが、今回は被調査者が刺激図版に直接記入したマークにもとづいて、cut off Wを含めたW反応とそれ以外の2種類に分類整理した。1刺激1反応法の影響もあるのか、全体反応の割合が高いようである。刺激番号Vと刺激番号IXの全体反応率が低いが、前者はいわゆる全体反応を構成しにくい典型的な刺激図版になっており、後者は薄いグレーを背景に相対的に濃いグレーのプロットが出現しており、濃いグレーのプロットに反応した被検者が多かったことによる。今後のshading要因の検討をすすめるうえで、反応領域の問題をどのように考慮すべきなのかまだ検討中である。

次いで反応理由の選択結果について検討する。反応理由の選択肢に用意したのは、①形態因子、②無彩色因子、③濃淡因子、④その他である。それらは片口のいう(前出, p.88)プロットの客観的構成要素だけで、運動感覚等のプロットの主観的構成要素は含まれていない。決定因に関する立場や議論はさておき、反応理由欄に運動感覚等を加えると被調査者が回答しにくくなる可能性があること、自由反応欄の自由記述やインクプロットへのメモによって運動感覚等のある程度カバーできると考えたからである。

①形態因子はどの刺激図版でもきわめて高い選択率を示している。ほとんどの反応形成に図版の形態因子が関与していると認識されている。次に高い選択率を示しているのは、③shading因子である。刺激番号IIIの半数の被調査者が選択しているのを筆頭に、刺激番号IX, VI, VIIIも40%台の選択率

を示している。②無彩色因子の結果では、刺激図版 VIII, IX が高い選択率を示した。③ shading 因子の選択比率が高い刺激図版は、いずれも薄いグレーの地に濃いグレーの図という特徴があるようにうかがえるが、反応領域や反応内容との関連で今後検討する必要がある。

表1 全体反応率と被選択反応理由

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
全体反応率	100	100	90.2	90.2	65.6	91.9	100	93.5	77.4	100
①選択率	91.8	100	96.7	90.2	93.4	91.9	100	93.5	87.1	100
②選択率	9.8	32.8	36.1	27.9	18.0	30.6	9.7	45.2	41.9	14.5
③選択率	16.4	36.1	49.2	26.2	37.7	41.9	25.8	41.9	43.5	9.7
④選択率	1.6	1.6	0	3.3	0	0	0	0	1.6	1.6

調査 II

調査IIは、前述の調査データから、shading 因子を反応決定因として多く選択した被検者とそうでない被検者の YG 性格検査への回答を比較することを目的とした。この調査も、調査Iの方法の妥当性を考えることと、研究そのものの可能性を試すことから実施されたものである。

[方法] 集合読み上げ方式で実施した YG 性格検査のデータを使用した。

[結果] データの処理は、前述の反応理由欄で③ shading 因子を多く選択した被調査者 (H-sh 群) と選択しなかった被調査者 (L-sh 群) に分けた。そして YG 性格検査の項目ごとに両群の回答傾向に差があるかないかを検討した。H-sh 群とは、刺激図版 I~V, 刺激図版 VI~X とともに、shading 因子選択3以上とし、L-sh 群とは shading 因子選択0とした。そして YG 性格検査の項目ごとに「はい」に2点、「いいえ」に0点、「どちらでもない」に1点をあたえて、グループごとに平均と標準偏差を算出した (逆転項目についてもそのままとした)。表2には、刺激I~VとVI~Xごとに、そしてそれらを合わせた刺激I~Xで、H-sh 群とL-sh 群に分けて、平均値で0.5以上の差が算出

表2 濃淡因子採択者のYG回答

番号 項目	I~V		VI~X		I~X		I~X t observed
	多採択者	少採択者	多採択者	少採択者	多採択者	少採択者	
	MEAN	MEAN	MEAN	MEAN	MEAN	MEAN	
9 人が見ていると仕事 ができない	0.88	0.39	0.36	1.10	0.68	0.64	
12 時々何に対しても興 味がなくなる	0.88	0.78	0.36	1.00	0.68	0.86	
15 一人きりでいたいと 思うことが時々ある	0.59	0.72	0.91	0.20	0.71	0.54	
26 会やグループのために 働くのが楽しみである	1.47	0.83	1.18	0.90	1.36	0.86	2.2958*
28 じっとおとなしくし ているのが苦手である	0.94	1.22	1.45	0.50	1.14	0.96	
33 すぐ感情を傷つけら れやすい	1.00	0.67	0.55	1.20	0.82	0.86	
36 時々自分をつまらぬ 人間だと思うことが ある	1.18	1.39	1.18	1.70	1.18	1.50	
37 人目に立つようなこ とは好まない	0.88	1.00	1.64	1.10	1.18	1.04	
43 人が見ていないとた いていの人は怠ける と思う	1.24	1.33	1.18	1.80	1.21	1.50	
44 とてもありそうにな いことを空想する	1.00	1.50	0.73	1.20	0.89	1.39	1.9977
49 異性(男なら女)の 友達はほとんどでき ない	1.59	1.28	1.82	1.30	1.68	1.29	
50 世話役はいつも人に 頼むことにしている	1.65	1.11	1.73	1.10	1.68	1.11	2.9284**
51 会話の最中にふと考 え込むせがある	1.47	1.00	1.64	1.10	1.54	1.04	2.2323*
55 人の親切には下心が ありそうで不安である	0.24	0.22	0.18	0.70	0.21	0.39	
61 人と広くつきあうの が好きである	1.41	1.67	2.00	1.30	1.64	1.54	
63 何でもよく考えてみ ないと気がすまない	1.00	1.50	1.00	1.00	1.00	1.32	
67 人は結局利欲のため に働くのだと思う	0.82	1.44	1.18	1.80	0.96	1.57	2.7892**

68	たびたび寝つかれないで困ることがある	0.59	0.83	0.18	0.80	0.43	0.82	
69	ちょっとしたことが仕事の邪魔になる	1.12	0.61	1.09	1.30	1.11	0.86	
73	誰とでもよく話す	1.24	1.22	1.73	1.10	1.43	1.18	
75	用心深いたちである	0.76	0.94	0.36	0.90	0.61	0.93	
77	いきいきしている	1.29	1.28	1.91	1.30	1.54	1.29	
78	気が短い	0.71	1.22	0.64	1.60	0.68	1.36	2.8607**
79	不満が多い	0.29	0.89	0.73	1.50	0.46	1.11	2.8073**
84	いつも疲れた気持ちである	0.82	0.56	0.36	0.90	0.64	0.68	
87	たびたび考え込むせがある	0.76	0.72	1.27	0.40	0.96	0.61	
88	お祭りさわぎが好きである	1.53	1.61	1.91	1.40	1.68	1.54	
89	新しいことにもすぐなれる	1.24	1.33	1.73	1.20	1.43	1.29	
96	たびたびゆううつになる	0.94	0.94	0.73	1.50	0.86	1.14	
99	のんきなたちである	1.00	1.61	1.45	1.30	1.18	1.50	
115	人は私を十分認めてくれない	0.71	1.00	0.45	1.00	0.61	1.00	
116	座っていても気分が落ち着かない	0.41	0.28	0.64	1.20	0.50	0.61	
120	たびたび元気がなくなる	0.94	0.78	0.73	1.40	0.86	1.00	

されたYG検査項目をリストアップした。結果の数値を見ると、I～Vで0.5以上の平均値の差が計算されても、IV～Xでは平均値に差が生じていなかったりなど、一定の傾向が認められない箇所もある。そこで、表2の後方列には両者を込みにして、平均値の差をみた。

アンダーラインの引かれた行は、刺激I～Xで、H-sh群とL-sh群で平均値に0.5以上の差のある項目であり、それについてt検定を実施した結果を示した（最後尾のt値の*は5%水準で、**は1%水準で有意である。自由度はいずれも54）。結果的に有意差が認められたのは、YG性格検査の、Co（協調的でないこと）とA（支配性）で2項目、O（客観的でないこと）、Ag（愛想の悪いこと）、

T (思考的外向) で1項目であった。

まずCoに関して有意差のあった項目は、[67 人は結局利欲のために働くのだと思う] [79 不満が多い] であり、いずれもH-sh群のほうが低い平均値を示した。H-sh群のほうが不満が少なく、人を信用する傾向があるようである。ついでAについてみれば、[26 会やグループのために働くのが楽しみである] [50 世話役はいつも人に頼むことにしている (逆転項目)] であり、社会的指導性やリーダーシップのある傾向を示している。Oについては、[44 とてもありそうにないことを空想する] であり、H-sh群のほうが、現実的で客観的であることをあらわしている。Agで有意差のあった項目は、[78 気が短い] で、これもH-sh群のほうが低い平均値を示している。Tで有意差のあった項目は、[51 会話の最中にふと考え込むくせがある (逆転項目)] で、H-sh群のほうが思考的内向の結果となっている。

考 察

さて今回の報告は、既述のとおりまったく探索的な試行であり、本結果からなんらかの結論を導こうとしたものではない。今後の研究を進めていくうえでの基礎的情報を得る目的で実施したものである。例えば、調査IIのt検定の結果から、「shading反応を多く産出する人は、不満が少なく、人を信用する傾向がある」と結論することができると考えているわけではない。そのように結論するためには、少なくともロールシャッハテストの個別法を実施したデータと、ここで報告した調査で得られたデータの間に高い相関係数が必要となろう。まだそのデータが得られていない現段階では、このような方法で実施するとこのようなデータが得られたので、今後研究を進めていく方向性が一応確認できたという状況である。

そこでこれからの研究課題を次に挙げておくことにする。基本的にはこの研究方法を進めていくことが可能である感触を今回得ることができたと考えられる。そのように考えると、まずロールシャッハテストそのものと、今回

の刺激を使った個別実験の結果を比較検討することである。ロールシャッハテストと同じ方法で個別にデータを収集した後に、今回の簡便法（アンケート法）の結果と比較、検討することが必要になる。

以上は、相関研究の順序についてであるが、インクプロット刺激の作成についても基本的な再検討が必要とされよう。今回は shading 反応を生起させることがねらいであったが、今後はさらに材質反応、立体（通景）反応、そして拡散反応などの生起を具体的に意図して刺激作成に取り組むことが課題であろう。そのためには、従来のロールシャッハ刺激でどのロケーションにどの種類の shading 反応が出現しやすいのか、そしてその shading 特徴を正確に分析することが課題となるだろう。

さらに今回の刺激は、shading や形態において左右がまったく同一であるとは言い難い。作成したインクプロットをそのまま刺激とする今回のような方法では左右対称性が得にくいので、それを改善するために作成したインクプロットをスキャナーで読み込み CG ソフトで変換するなどの方法が検討されるべき課題である。

〔引用文献〕

- Beck, S. J., Beck, A. G., Levitt, E. E. & Molish, H. B. (1961) Rorschach's Test I Basic processes 3rd rev. ed., New York, Grune & Stratton.
- 片口安史 (1997) 改訂 新・心理診断法, 金子書房.
- Klopfer, B., Davidson, H., (1962) The Rorschach Technique An Introductory Manual. (河合隼雄訳: ロールシャッハテクニック入門, ダイアモンド社.)
- Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G. & Holt, R. R. (1954) Rorschach Technique, New York, Word Book Company.
- 本明寛, 滝沢清子, 富田正利, 湯本泰道 (1972) II 臨床的実施法と分析法, 心理診断法双書ロールシャッハテスト1, 中山書店.
- Piotrowski, Z. A. (1957) Perceptanalysis (上芝功博訳: 知覚分析, 新曜社).
- Rorschach, H. (1954) Psychodiagnostik (片口安史訳: 精神診断学, 金子書房, 1976).

〔注〕

- (1) shading 反応は、手元の本邦のロールシャッハテストの書では、明暗反応（本明・滝沢・富田・湯本：1972）、陰影反応（Piotrowski）、濃淡反応（Klopfer）と翻訳されている。筆者は濃淡反応という訳語が適当と考えているが、未だ定着していない現状から shading 反応とした。
- (2) なお本報告は、早稲田大学人間総合研究センターの研究費補助を受けた。